

博士學位論文審査報告

題 目： 近世における啓蒙的文芸の研究—実用的散文の展開—
氏 名： 湯浅 佳子

論文審査委員：	主査	稲田 篤信	本学文学部教授
	副査	磯 水絵	本学文学部教授
	副査	鈴木 健一	学習院大学文学部教授
	副査	町 泉寿郎	本学文学部教授

論文内容の要旨

仮名草子、浮世草子、読本、洒落本、黄表紙など、近世小説の名称で総称される江戸期の俗文芸は、出版文化の成立にともなって新しい読者層を獲得した。本論文はこれらの文芸が読者大衆の娯楽・教養・実用に配慮した内容をもつことに着目し、これを啓蒙的文芸と位置づけ、実用性（教訓性や啓蒙性）と文芸性（娯楽性や慰藉性）との両面にわたる文芸の効用の検討を中心課題として、近世小説の史的展開を論じたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

目次

序論

凡例

第一部 仮名草子の生成基盤

第一章 仮名草子と中世文芸

- 一、『詞花懸露集』の成立
- 二、『薄雲恋物語』考
- 三、『錦木』の性格
- 四、『安倍晴明物語』と中世の伝承

第二章 仮名草子と思想

- 一、『他我身の上』の三教一致思想
- 二、清水春流と護法書

- 三、『うしかひ草』と「十牛図」「牧牛図」
- 四、『伽婢子』の仏教説話的世界—教養としての儒仏思想の浸透—

第三章 仮名草子と怪異譚

- 一、『曾呂利物語』二話—その怪異性について—
- 二、『曾呂利物語』の類話
- 三、怪異説話の展開—『曾呂利物語』と『宿直草』—
- 四、『宿直草』の創意—巻四—一六「智ありても畜生はあさましき事」—
- 五、助と累—『死霊解脱物語聞書』より—

第四章 仮名草子と歴史

- 一、『鎌倉管領九代記』の歴史叙述の方法
- 二、『鎌倉北条九代記』の歴史叙述の方法—『日本王代一覽』『太平記評判秘伝理尽鈔』等との関わり—
- 三、『鎌倉北条九代記』の背景—『吾妻鏡』『将軍記』等先行作品との関わり—
- 四、『北条記』『東乱記』『小田原記』について

第二部 近世中期・後期散文への展開

第一章 説話考証随筆『広益俗説弁』の研究

- 一、『広益俗説弁』の性格
- 二、『広益俗説弁』と周辺書—俗説の典拠類話と俗説批評の背景—
- 三、金王丸と土佐坊昌俊—『広益俗説弁』巻十二より—

第二章 三教一致思想と談義本・読本

- 一、増穂残口の神像説—『先代旧事本紀大成経』との関わりを中心に—
- 二、大江文坡の談義の方法—『成仙玉一口玄談』を中心に—
- 三、『南総里見八犬伝』と聖徳太子伝
- 四、聖徳太子と瓢箪—『先代旧事本紀大成経』から『聖徳太子伝図会』へ—
- 五、読本『小野篁八十嶋かゞ』における篁説話の展開
 - (附録一)『先代旧事本紀大成経』の「神代皇代大成経序」
 - (附録二)『先代旧事本紀大成経』の「帝皇本紀」—聖徳太子関連記事を中心に—

第三章 馬琴読本の世界

- 一、『南総里見八犬伝』の犬と猫—『竹箆太郎』と口承伝承との関わり—
- 二、『盆石皿山記』小考

- 三、『新累解脱物語』考
- 四、趣向と世界—演劇・草双紙から読本への影響—
- 五、『三七全伝南柯夢』の楠譚
- 六、『松浦佐用媛石魂録』における忠義と情愛
- 七、『近世説美少年録』と阿蘇山伝説

附章 近世説話の展開

- 一、小野小町伝説の一系譜—病める小町の話—
- 二、人面瘡考—江戸時代の文芸作品を中心に—

あとがき

初出一覧

本論文の序論及び各部各論の内容は以下の通りである。

序論

湯浅佳子はまず頼原退蔵、中村幸彦、前田金五郎らの近世小説史研究を概観して、中世小説が写本による伝統的な雅の文芸であるのに対して、近世小説は出版による娯楽的啓蒙的な俗の文芸としての性格を持つことを確認し、これを承けて仮名草子が文芸性と実用性の二面性を兼備しているという意味で近世小説の基本様式を備えていると述べ、この観点から近世小説の史的展開を論じていくという本論文の立場を明確にした上で、二部構成の各部各章の概要を述べている。

第一部は近世前期文芸の仮名草子研究として、中世の艶書文芸の流れを汲む作品、儒・仏・老の三教一致思想が説かれた作品、口誦的性格を残す怪異談、通俗的歴史読物を取り上げ、仮名草子の表現、知識啓蒙の姿勢、宗教や知識の通俗化の諸相を論じている。

第二部は第一部を承けて、中期・後期文芸の談義本・考証随筆・読本・近世説話について、それぞれの持つ思想的特質について考察を行っている。特に井沢蟠竜著『広益俗説弁』、増穂残口、大江文坡の談義本、『先代旧事本紀大成経』を重点的に取り上げ、三教一致思想を中心とした中後期小説の思想性を論じている。さらに、馬琴読本を中心とした後期読本を取り上げて、作品世界を構成する説話や演劇について考察している。

各章各節の内容は以下の通りである。

第一部 仮名草子の生成基盤

第一章 仮名草子と中世文芸

一、『詞花懸露集』の成立

本節では書簡体の女誠書『詞花懸露集』が「堀河院艶書合」、艶書文例集二種、伝阿仏尼「庭のをしへ」の四つの内容からなり、艶書文例二種を甲乙に分けると、甲が『古今集』、『源氏

物語』、『和漢朗詠集』などが利用されて、文範としての実用性と知的な遊戯性を備えるという。また、乙は艶書に取り入れられた歌語や和歌の解説に重点が置かれ、和歌や古典の教養を教えることに主旨があると述べ、あわせて艶書や物語を作る創造性と知識を提供する啓蒙実用性の二面性が近世初期の仮名草子の特徴であると述べる。

二、『薄雲恋物語』考

本節では室の明神の申し子・薄雲の恋の物語を描いた『薄雲恋物語』が「かなおか」の孝行による利益譚を中世風恋物語の外枠に置いて、二十四孝的教訓要素を加味した近世風の物語になっていると論じる。

三、『錦木』の性格

本節では男女の恋文の贈答を内容とする『錦木』に、『和歌題林愚抄』、『類字名所和歌集』などの類題和歌集や歌論書が引用されていることを指摘し、和歌の指南書としての啓蒙性とともに、多様な恋を題材とすることで、読み物としての興味を加えていると述べる。

四、『安倍晴明物語』と中世の伝承

伝浅井了意作『安倍晴明物語』は陰陽師安倍晴明の一生と陰陽道書『三国相伝簠簋内伝金烏玉兔集』の由来を説く。本節では本作に『簠簋抄』がどう利用されているかを具体的に分析し、作者は室町から江戸初期までに行われた辞書『異制庭訓往来』や囲碁指南書『碁経』、神代紀注釈『日本書紀神代紀抄』、法華経注釈書『法華経直談鈔』、『法華経鷲林拾葉鈔』、未来記『長恨歌 琵琶行 野馬台』などの言説を利用して、話の面白さと知識とを提供していると述べる。

第二章 仮名草子と思想

一、『他我身の上』の三教一致思想

本節では『他我身の上』の儒仏（特に禅）の三教思想が林希逸『莊子麤斎口義』に媒介されているとして、元隣の教訓の背景について考察している。また元隣の師北村季吟の俳論は、根拠のないたとえ話も「過当」な表現をして読者をおどかせて導くためのものであるという『莊子麤斎口義』の寓言論に基づくものであり、元隣は師説を継承し、本書は談義本以前に『莊子麤斎口義』の寓言論を取り入れた作品であると述べる。

二、清水春流と護法書

本節では、儒家であり仮名草子作者であった清水春流の『寂莫新註』、『儒道法語』、『嵯峨問答』に見られる言説は、陰陽二気が散じても霊は不滅であるとする神不滅論をふまえていることを指摘する。また、彼の『儒家十馬図』は明普明「十牛図」の和刻本『新刻禅宗十牛

図』によって、牛を馬に換え、護法書の儒仏融合論に依拠しながら因果や輪廻、悟りといった仏説を儒家の言葉で語ろうとしていると指摘する。そして春流は『指月夜話』の著者潮音道海ら黄檗僧から護法論を学んだのではないかと推定している。

三、『うしかひ草』と「十牛図」「牧牛図」

月坡老人『うしかひ草』は禅画「十牛図」になぞらえて十二の図と仮名文の物語と和歌を付したものである。本節はこれを寛文八年板『四部録』所収の「十牛図」、『新刻禅宗十牛図』と比較して影響関係を考察している。そして、仮名草子の作品には禅の教えを人の一生の歩みとして読まれるような工夫が為されていると示唆している。

四、『伽婢子』の仏教説話的世界—教養としての儒仏思想の浸透—

本節は浅井了意『伽婢子』から悪人断罪の話をも五話、悪霊退散の話をも三話、慈悲・正直の話をも四話、孝行・貞節の話をも二話、亡者の妄執の話をも四話取り上げて、原話の改変、儒仏神の三教的要素などについて考察している。そして『伽婢子』は靈験、因果応報、妄執の救済といったストーリー展開によって神仏の教義が教訓として示される一方、異界の神秘的な情景や人物の苦悩や情愛が描かれて、教訓性と文芸性を兼ね備えた作品になっていると論じている。

第三章 仮名草子と怪異譚

一、『曾呂利物語』二話—その怪異性について—

本節では、『曾呂利物語』二の七「天狗のはなつまみ事」の類話に『諸国百物語』一の三、『宿直草』二の六、巻四の六「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」の類話に、『諸国百物語』二の十一、『宿直草』二の四をあげてそれぞれ比較し、『曾呂利物語』の怪異性の希薄さ、また因果や道理を強調しないところがかえって「咄」としての普遍性を備えていると論じる。

二、『曾呂利物語』の類話

本節では近世怪異小説の源流とされる仮名草子『曾呂利物語』四十一話の梗概を述べ、類話を提示している。その結果、延宝五年刊『諸国百物語』には約半数の類話があり、影響関係が指摘できる。また、同年刊『宿直草』についても、『諸国百物語』のような緊密な類似性はないが、『曾呂利物語』との関連、もしくは同材の共有が推測できるという。また、『今昔物語集』、『因果物語』、『武将感状記』など、本作の成立基盤となる類話を指摘する。

三、怪異説話の展開—『曾呂利物語』と『宿直草』—

『曾呂利物語』巻五の五「因果ざんげの事」は、行脚の僧が旅の宿で度重なる災厄に見舞われるが、危うく一命を得る話である。従来、この一話は『宿直草』巻一の二「七命ほろび

しゐんぐはの事」、同五の七「学僧ぬす人の家に宿かる事」、卷五の八「道行僧山賊にあふ事」の三話との関連性が指摘されていた。本節では、これらに卷五の四「曾我の幽霊の事」を加えると、『宿直草』各篇は『曾呂利物語』の一話を分割して、新たな構想で趣向を取り出し、仏教色を弱めながら因果応報の現実的な人間の不思議さを描いたものであると述べている。

四、『宿直草』の創意一卷四——一六「智ありても畜生はあさましき事」——

『宿直草』巻四の一六「智ありても畜生はあさましき事」は、前世に僧であった老狐の話であるが、従来、狂言「こんくわい（釣狐）」、『無門関』「百丈野狐」との関連が指摘されていた。本節ではさらに内容を吟味し、『宿直草』では先行説話の話型を踏まえつつも、ここでも仏教色を弱めて人間の現実の歎きを伝える物語性が与えられていると述べている。

五、助と累—『死霊解脱物語聞書』より—

仏教長編説話『死霊解脱物語聞書』は祐天上人の説話として知られるが、本節では、本作の累や助といった虐げられた者たちの描かれ方において、当代の仏教説話や『因果物語』などの怪異譚を越えたりアルな造型を実現していると述べている。

第四章 仮名草子と歴史

一、『鎌倉管領九代記』の歴史叙述の方法

平仮名絵入本の『鎌倉管領九代記』は足利基氏以下義氏までの鎌倉公方九代の歴史である。本節では従来指摘されている典拠に加えて、新たに水戸彰考館史臣丸山可澄編『諸家系図纂』「喜連川」系図（『喜連川判鑑』）の利用を指摘し、作者は『北条五代記』や『甲陽軍鑑』などの複数の記事を組み合わせ、創作的要素を加えて平易に記述していると指摘する。また、人物批評に意を払い、善悪を際立たせ、歴史の趨勢を分かりやすく述べる、という三点の特質を指摘している。

二、『鎌倉北条九代記』の歴史叙述の方法

—『日本王代一覧』『太平記評判秘伝理尽抄』等との関わり—

漢字片仮名交じり文『鎌倉北条九代記』は、源頼朝の鎌倉幕府成立以下、北条高時の死去まで、北条九代執権の事蹟を記したものである。本節では本作の典拠としては、主に『日本王代一覧』に拠って『太平記』を併せ用い、人物批評には『吾妻鏡』や『太平記評判秘伝理尽抄』に拠って仏法・王法・神道の一体論、民への仁政を旨とした為政者の取るべき態度を基準にして褒貶を行っていると述べる。また、民への同情という面で、庶民救済という仏教唱道者としての視点があるとも述べる。さらに浅井了意の仮名草子作品との共通性を指摘し、本書を了意作とすることを支持している。

三、『鎌倉北条九代記』の背景—『吾妻鏡』『将軍記』等先行作品との関わり—

本節では『鎌倉北条九代記』十二卷十三冊全二百三話（章）について、背景にある先行作品を逐一列挙して依拠関係を略述している。また、本作は『将軍記』を骨格として用い、『吾妻鏡』、『太平記』等を主典拠として書かれているが、王権の衰微と武家の盛衰に関する言説に特色が見られ、『太平記評判秘伝理尽鈔』、『日本王代一覧』などを利用して人物評価がなされていると論じている。また、その他の特色として、天変地異や仏教関連記事、奇談、歴史などの記事が見られることを指摘し、本作が分かりやすい読み物の中に、被治者の立場に立った仏教的立場からの政道論が織り込まれていることを示唆している。

四、『北条記』（『東乱記』『小田原記』）について、

『北条記』は近世初期の成立が推測されている戦国期の関東軍記の一つで、別名『東乱記』、『小田原記』、『相州兵乱記』等々と称されるように、異本が数多く伝来する。本節は従来の『北条記』研究に独自の調査を加えて、諸本を八種類に系統分類し、四十五本について特徴を考察したものである。

第二部 近世中期・後期散文の展開

第一章 説話考証随筆『広益俗説弁』の研究

一、『広益俗説弁』の性格

本節では井沢蟠竜『広益俗説弁』の性格について、近世説話、特に人物総伝の立項の仕方が藤井懶斎『本朝孝子伝』に類似し、林羅山、貝原益軒など儒家の説を多く取り入れて、その上で、蟠竜は道德の根本を神道に求める世界観がうかがえると述べている。

二、『広益俗説弁』と周辺書—俗説の典拠類話と俗説批評の背景

本節では『広益俗説弁』正編から残編までの俗説批評の典拠と推定されるもの及び類話を、俗説の典拠・類話（前節の補遺）、俗説批評の周辺、に区分して指摘し、内容上の関連を考察している。そして、従来の指摘を承けて、当代の知識人（谷秦山、棕梨一雪ら）や書肆（柳枝軒）との関わりなど、今後の調査の方向性についても述べている。

三、金王丸と土佐坊昌俊—『広益俗説弁』巻十二より—

本節では『広益俗説弁』巻十二「土庶」「渋谷金王丸、後に土佐坊と号する説」を取り上げて、中世から近世期の金王丸を土佐坊とする伝承説話を概観し、『参考平治物語』、『参考源平盛衰記』など近世期の史書、また『尊卑分脈』を用いて、流布する俗説の誤りを正している。そして、蟠竜の俗説考証には『大日本史』の諸書を比較検討して考証する記述態度と通じるものがあるという。

第二章 三教一致思想と談義本・読本

一、増穂残口の神像説—『先代旧事本紀大成経』との関わりを中心に—

神道講釈の分野で享保期を中心に活躍した増穂残口は、天照大神以下の神像を作ることと推奨したことで知られる。本節では、残口の『有像無像小社探』の当代三教（儒仏道）批判が伊勢神道・垂加神道の説に基づき、『先代旧事本紀大成経』の有形の神説に依拠することを述べる。

二、大江文坡の談義の方法—『成仙玉一口玄談』を中心に—

仏教長編説話の勧化もの作者として知られる大江文坡は後に神仙教の説を標榜したことで知られるが、彼が繰り返し説く「清浄無為真一」説は『成仙玉一口玄談』、『小野小町行状記』、『抜参残夢物語返答』などを検討すると、禅の法語や仮名草子に見られるものであり、彼の神仙教は禅の教えを基本にしている。そして、文坡の談義の方法は印象的なキャッチフレーズと虚構の中で分かりやすいたとえとして記す寓言の方法を用いたことに特色がある、と述べる。

三、『南総里見八犬伝』と聖徳太子伝

馬琴の『八犬伝』の八犬士の一人、犬江親兵衛は四歳の時に握った左のこぶしから仁の玉が出てきたという奇瑞を持つ人物であるが、本節ではこうした親兵衛の人物造型やストーリー展開に『先代旧事本紀大成経』、『聖徳太子伝暦』、『聖徳太子伝』の太子伝が利用されていることを指摘する。

四、聖徳太子と瓢箪—『先代旧事本紀大成経』から『聖徳太子伝図会』へ—

聖徳太子伝を読本化した『聖徳太子伝図会』（若林葛満作西村中和画）の一節には、讃岐国から献上された瓢箪を太子が手に取ると右手が開き、中に瓢箪の「仁（たね）」があったという奇瑞を記す。本節は近世期の太子説話を展望し、このエピソードは『先代旧事本紀大成経』に由来することを指摘する。

五、読本『小野篁八十嶋かげ』における篁説話の展開

『小野篁八十嶋かげ』（是水叟菊亮作速水春暁斎画）は近世篁説話の集大成のごとき作品であるが、本節においては、本作の人物造型には、大江文坡『小野小町行状記』、山東京伝『善知鳥安方忠義伝』などが利用され、篁が北斗七星の「天罡星（はぐんせい）」の化身として描かれることについて、近世中期の妙見菩薩信仰を背景として、毘沙門天と北斗星を習合させる信仰をふまえていると論じている。

（附録一）『先代旧事本紀大成経』の「神代皇代大成経序」

『先代旧事本紀大成経』正統七十四卷は、天照大神の本宮を伊雑宮とすることで、伊勢神宮の抗議を受け、天和元年に幕命により絶版となった偽書である。附録一では、延宝七年板国立国会図書館蔵『先代旧事本紀大成経』の「神代皇代大成経序」について翻刻と考察を行っている。

(附録二)『先代旧事本紀大成経』の「帝皇本紀」

—聖徳太子関連記事を中心に—

附録二において、『先代旧事本紀大成経』の刊写本を紹介し、同書の聖徳太子関連記事を検討し、八幡縁起など利用して、神意を具現化するための人物として太子を描いているとし、本書が神道を中心とした三教思想を提唱する内容を持つことを指摘する。

第三章 馬琴読本の世界

一、『南総里見八犬伝』の犬と猫—『竹箆太郎』と口承伝承との関わり—

曲亭馬琴作『八犬伝』には、里見義実が戯れに愛犬八房に敵将の首を取ってくれば、伏姫を与えようという、いわゆる口の咎の場面を初めとして、犬や猫など、動物を登場させる場面が多い。本節では『八犬伝』のプロットをいくつか取り上げ、栗枝亭鬼卯作『犬猫怪話 竹箆太郎』及び「竹箆太郎」伝承との関連を指摘する。

二、『盆石皿山記』小考

本節では、馬琴の中本型読本『盆石皿山記』について、一、明德の乱、二、くじかの怨霊、三、宇那提の森蛇、四、紅皿欽皿、五、皿屋敷、六、筑摩の神事、七、源七と欽皿の七つの内容を取り上げ、鹿の妖怪伝承、紅皿欠皿伝承、皿屋敷伝承などさまざまな伝承説話が取り入れられていることを指摘し、これらが勧善懲悪的な構想の下に組み入れられている点、本作が後の馬琴読本の特色をすでに備えた作品であると評価している。

三、『新累解脱物語』考

本節では曲亭馬琴作『新累解脱物語』が仏教長編説話『死霊解脱物語聞書』の全体の構図を踏襲していることを踏まえながらも、なお登場人物に与えられている美醜、貞実、善悪、法力などの属性が、馬琴の作品では、『雨月物語』『吉備津の釜』などを取り入れて、貞女が怨霊になる話に改変するなど、因果応報の展開として作られていると述べる。

四、趣向と世界—演劇・草双紙から読本への影響—

本節では浄瑠璃『伊達競阿国戯場』を中心にした累もの演劇や草双紙を取り上げて、与右衛門殺し、小袖、鏡、祐天上人の役割などのモチーフが馬琴読本『新累解脱物語』にどのように取り入れられているか、世界と趣向という演劇用語を援用して論じている。そして『新

『累解脱物語』は因果応報と勧善懲悪を司る烏有上人（祐天にあたる）を世界として設定し、美を驕慢の悪として描くなど、馬琴独自の人物解釈を施しながら、これらを趣向として利用していると述べている。

五、『三七全伝南柯夢』の楠譚

本節では『艷容女舞衣』の三勝・半七の心中事件を読本化した『三七全伝南柯夢』に描かれる霊木・楠譚を取り上げて、馬琴の作品ではこの怪異譚が節儉や忠孝といった教訓の物語に組み替えられている点に特色があると述べている。さらに、馬琴の物語は自然界の靈妙なものの無心の信仰を基本的な思想とするとし、ここには増穂残口をはじめとする近世中期の神道説が根底にあると示唆している。

六、『松浦佐用媛石魂録』における忠義と情愛

『松浦佐用媛石魂録』は、大伴狭提彦・松浦佐用姫の伝説に取材した作品である。本節ではこの古代説話の近世的展開を押さえながら、本作の場合、佐用姫の離別した夫への絶ちがたい情念を業因として、この因縁を果たす形で、秋布、玉嶋、また吉次・浦二郎兄弟などの人物像が造型されていることを論じている。

七、『近世説美少年録』と阿蘇山伝説

『近世説美少年録』冒頭には阿蘇山・阿蘇沼の氾濫が描かれるが、本節では『太宰管内志』、『阿蘇宮由来略』など、阿蘇山ゆかりの諸史料に記録される伝説と作品の物語展開を重ね合わせている。

附章 近世説話の展開

一、小野小町伝説の一系譜―病める小町の話―

小町伝説の一要素である病による零落説話を取り入れた近世期以降の作品、梅柳山人『小野小町翁嚙』、小松弘毅『小野小町貞女鑑』、谷口流鶯『小野小町』、合巻『浮世源氏絵』、須藤南翠『江戸小町』を紹介している。

二、人面瘡考―江戸時代の文芸作品を中心に―

膝の腫瘍によって脚がやせ細り歩行困難になる奇病は、その傷が人の顔の様であるところから「人面瘡」と呼ばれ、和漢の説話、怪異譚に取り上げられている。本節では浅井了意『伽婢子』、明徐応秋『玉芝堂談薈』など和漢の諸書から例をあげ、馬琴『新累解脱物語』、山東京伝『敵討狼河原』、同『松梅竹取物語』などの読本や合巻に取り入れられていることを論じている。

論文審査の結果の要旨

近世文芸の効用を実用性と文芸性の両面性として捉えることは、近世文学研究の上で既に通説化している。本論文の提出者・湯浅佳子もこの研究視座を踏襲しつつ、仮名草子から読本に至る近世小説の諸相を論じているが、その際、仮名草子の中にこの文芸様式の原型があるという立場から近世小説の史的展開を展望しているところに本論文の大きな特色がある。

本論文の方法は作品とその類話、また作品に取り込まれている典拠との比較分析である。湯浅佳子は丹念な諸本の調査作業や膨大な量のテキストの読破によって、類話や典拠の例証を次々に挙げていき、作品間の連関を明らかにしている。探索は博搜と煩を厭わぬ丹念さを以て行われており、ここに挙げられた文献の豊富さには驚くべきものがある。

湯浅佳子が本論文において重点的に用いている文献は、通俗軍記、実録体小説、増穂残口や大江文坡などの勧化本、『広益俗説弁』のような考証随筆、『先代旧事本紀大成経』といった神代紀注釈である。これらの中には必ずしも学問的な吟味に耐えられない偽書も含まれる。湯浅佳子は文学概念の枠組みを拡大することによって、こうした、従来、近世小説研究の分野では周縁的な扱いを受けていた文献に新たな光を当てて積極的に援用し、小説との対応を具体的に示すことに成功している。文学に反映されている近世人の思想として、三教一致の通俗道徳が重点的に取り出されている点などは、その成果の一例である。『八犬伝』に『先代旧事本紀大成経』等の太子伝が利用されていることを指摘した論(第二部第二章第三節)は、作品研究史に一石を投じただけでなく、近世小説研究の今後に示唆するところの多い研究である。こうした考察を通じて、近世文芸は、大衆化し、通俗化する機制を通じてこそ広く浸透する教養や思想としての世界を持つことが開示され、広範な近世人の知の世界が展望されることになった。本論文の開拓的な意義として評価されるべきものである。

しかし、今回の論文においては、類話や典拠の提示に中心的な課題を設定しているためか、作品分析において典拠や類話がどのように変容されて近世的な主題となったか、表現や構造に踏み込んだ分析にやや乏しい。また、雅と俗、通俗性、啓蒙性、実用性といった、近世文学研究では通説化されているパラダイムを用いて論を進めて、有効な成果を上げている反面、無批判に依拠している安易さも若干うかがわれる。小説を商品として享受する近世の読者にとって、啓蒙性、実用性とは何かなど、一歩踏み込んだ実証的考察が望まれる。談理と談奇の内容を持つ浮世草子の諸作品についても、十分な言及が望まれる。

以上のような問題点はあるが、本論文を構成する個々の論の過半は、日本文学研究の代表的な全国誌に掲載された水準の高いものであり、本論文はこれらを総合することでさらに求心性を備えた文学史的探求として成果をあげており、近世小説史研究に大きな貢献をするものであると評価することが出来る。よって、審査委員一同は一致して、本論文が「博士(文学)」(乙)の学位を授与するに値するものであると認定した。